



Title	日本近代児童文学における 死と生命の表現 の研究：『赤い鳥』童話作品を中心として [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	王, 玉
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12954号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/70204">http://hdl.handle.net/2115/70204</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Wang_Yu_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 王 玉

主査 教授 中 村 三 春  
審査委員 副査 教授 押 野 武 志  
副査 教授 大 西 郁 夫

## 学位論文題名

日本近代児童文学における〈死と生命の表現〉の研究  
——『赤い鳥』童話作品を中心として——

### ・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は日本近代児童文学の中核的な雑誌であり、初の芸術的児童雑誌と言われる『赤い鳥』の掲載作品を対象として、〈死と生命の表現〉の観点から総合的な検討を行った初めての研究である。日本近代文学においては死と生命の問題は主要な研究テーマの一つとして追究されてきたが、児童文学の領域においては十分な研究が行われていなかった。最近では、宮澤賢治・坪田譲治・小川未明らの著名な児童文学作家の作品を対象として、特に死の表現を中心とした追究も現れているが、児童文学雑誌としての『赤い鳥』の総体を考察の課題としたものはいまだ存在しない。その意味で本論文の研究は、研究史の欠落を確実に埋める性質のものと言うことができる。

本論文は、当時文壇で既に活躍していた作家と新進の作家のいずれにも積極的に執筆させていた『赤い鳥』の特徴に即し、森田草平・宇野千代・宮原晃一郎・下村千秋・加能作次郎・坪田譲治・小川未明ら多数の作家の作品を取り上げ、個々の特性に応じて逐一分析・解釈・評価を加えている。それとともに、欧米の昔話の再話作品をも考察の対象とし、昔話の再話作品、動物の死、身近な人の死、他者の死、子どもの死などの分類ごとの網羅的な分析を行い、総体としての『赤い鳥』における〈死と生命の表現〉に接近する工夫を凝らしている。その際に援用されるのは、昔話の構造分析、児童心理学、キリスト教、死生観、また実地調査などに基づく多様な方法論であり、さらに主宰者鈴木三重吉による編集方針にも言及して、『赤い鳥』童話作品の全体像に接近することを試みた。その結果として本論文は、これまで子どもを純真無垢な存在と見なす童心主義に偏ったとされてきた『赤い鳥』の文芸様式のうちに、死や生命を見据える現実性の要素が濃厚に認められることを示し、研究史の通説に対して一石を投じるものである。

これらの特長によって、本論文は『赤い鳥』を中心とする日本児童文学の研究において、傑出した研究成果を示すものと言うことができる。

### ・学位授与に関する委員会の所見

本論文は作品研究の対象として森田草平「鼠のお葬ひ」、宇野千代「三吉とお母さん」、宮原晃一郎「身に咲いた花」、下村千秋「曲馬団『トッテンカン』」、加能作次郎「少年と海」、坪田譲治「小川の葦」、小川未明「町の天使」などを取り上げている。これらは詳細な作品分析と他作品との関連・対照において死と生命の表現の観点から評価されており、それらはいずれも相当の説得力をも

って論証されている。のみならず本論文は、巻末に付された「別表」において、分類別に総数として200作を超える『赤い鳥』所収作品の分析を一覧表化しており、そのうち本論において言及された作品も相当数を数える。これらに欧米昔話の再話作品の検討と主宰者鈴木三重吉の編集についても分析を加え、本論文は児童文学雑誌『赤い鳥』を〈死と生命の表現〉の観点から総合的に再評価したものと言える。その結果として本論文は対象作品において自然界における捕食関係や人間の動物殺し、さらに人間の死の様相を見つめ直し、それらに現れた超自然的要素や生への欲求などの要素をも含め、子ども特有の死生観や死に直面した子どもの意識から社会・文明批判などの特徴を取り出し、総じて童心主義雑誌と言われた『赤い鳥』における現実性の要素の存在を説得力をもって論証することに成功している。これらのことから、本審査委員会においては、原則的に本論文を、高い水準にある研究として評価した。

ただし、幾つかの点に互って、やや疑問の余地もなしとはしない。すなわち、第一に、本論文は1918年から1936年まで続いた『赤い鳥』について、全一体のものとして追究しており、史的変遷の観点からの考察が見られないこと、第二に、欧米昔話の再話作品を創作童話と同列に扱っており、その再話としての構造に対する考慮が乏しいこと、第三に、昔話の構造分析の理論や児童心理学などの援用に不十分なところがあり、必ずしも作品研究に対して有効に機能しているとは言えないこと、第四に、鈴木三重吉の編集方針をいわば絶対視しており、そこからの逸脱や展開などの可能性に対しての目配りが不足していることなどである。しかし、これらの諸点はいずれも本論文の意欲的な研究姿勢と表裏をなすものであり、より高度な学術的要求であって、いささかも本論文全体の完成度を損なうものではなく、また結論で展望されたように今後も『赤い鳥』など日本児童文学の研究を続ける中で十分に昇華しうる課題である。

本審査委員会は、以上のような審査結果に基づき、全員一致により、本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。